

ると、自然な形でかつ明確に悟らせるよう編集されていると想定される。

これに対してマタイでは、その大半がユダヤ人改宗者であるとされる彼の読者に向けて、敢えて多くのユダヤにおける終末論的表象が絡められつつ「闇」は、マルコと同様にイエスの死と共に「神の審判」「救済の業」が成就することの前触れとして一層工夫が凝らされつつ、更に「イエスの死の出来事」を世界全体に及ぶ神の救済の業との解釈がなされて伝達されている。

ルカにおいては、「闇」は旧約の背景が受容されつつも、そこにその文脈を超えたヘレニズム・ローマ世界の更なる背景、即ち、偉人の死と結び付けられる尋常ならざる自然現象という枠組みが重ねられて描かれていると想定される。ルカにおいてイエスの死の場面は、「誕生物語」及び「幼年物語」とパラレルに、より広範な物語上のまたヘレニズム・ローマ世界の表象を用いた枠組みの中で、伝達の意図を持って人ならぬ特別な存在として解釈され編集されていると想定される。

このように、共観福音書における「闇」の表象はイエスの死の出来事の意味づけ／解釈を象徴的に表現するために編集されたものであり、その意味づけの軌跡を示す指標となる記述であることが確かめられると同時に、このような死を意味づける語りが世界宗教キリスト教の発祥に欠くことの出来ないものとして存在しているということが改めて確かめられる。

オリゲネスの著述活動と「テキスト共同体」

出村 みや子

「テキスト共同体」という言葉は特に目新しい概念とは言えないが、古代末期の地中海ローマ世界の宗教思想を特徴づける言葉として最近見られるようになった概念であり(G. Fowden, P. Brown, M. Niehoff, G. Snyder)、特に二―三世紀の古代アレクサンドリアの宗教的状况を記述するのに有効であると思われる。フィロンからクレメンスに継承され、オリゲネスにおいて発展を見た創世記一六章のサラ・ハガルの物語の聖書解釈を「テキスト共同体」に焦点を当てて比較すれば、彼らの宗教共同体が置かれた当時のアレクサンドリアの文化状況やホメロス解釈の文献学的伝統の影響を受けながら、各々が独自に聖書解釈を行っていたことがわかる。この創世記の箇所解釈は中世における「神学の侍女(*ancilla theologiae*)としての哲学」の起源となった他、アレクサンドリアの神学的伝統が多大な影響を後代の教会史に及ぼした点においても重要な意味を持つ。

フィロンの『予備教育』は創世記一六章におけるサラとハガルの物語を予備教育と哲学の関係を示すアレゴリー(寓意)として解釈する試みであり、その背景には当時のヘレニズム諸都市に住むユダヤ人にはこの物語を字義通りに理解することが困難となっていた状況があった。フィロンは族長時代の物語を、アレゴリー解釈を通じて当時の基礎教育や哲学の問題に移し変えているが、彼が聖書(「七十人訳(LXX)」)にギリシアの哲

学的解釈を加えたのはアレクサンドリアの文献学的方法を聖書に適用しようとする彼の同僚の恣意的な校訂作業に余地を与えないためであり、字義的解釈が意味をなさない場合には敢えて哲学的アレゴリーを適用して聖書本文を守ろうとしたのである。クレメンスが哲学のために弁明的記述を行った背後には、箴言五章三節に基づいてヘレニズム文化や哲学を批判するキリスト教徒たちの存在があった。これに対してフィロンの解釈を継承したクレメンスは、聖書解釈を通じて信仰に役立つ限りにおいて世俗の学問に一定の役割を与えようとした。

オリゲネスは創世記の「サラハガル伝承」を予備教育との関連ではなく、聖書解釈法の文脈で扱っている。彼は『諸原理について』第四巻第二章で三層的聖書解釈の方法について述べた後、具体的な聖書箇所を挙げて三種類の聖書解釈法の説明をしている。ここで彼は「ホメロスをホメロスによって解釈する」方法をパウロの範例(ガラテア四章二以下)に倣って聖書解釈に適用し、「聖書を聖書によって解釈する」聖書の内在的解釈法を確立すると共に、さらに旧約聖書の六欄組対観「ヘクサブラ」の編纂に際してもアレクサンドリアの文献学的方法を積極的に採用している。ただし「ヘクサブラ」の編纂に際して彼が他のギリシア語訳に対して当時の「七十人訳(TXX)」をキリスト教の立場から正当化する意図があったことは否定できず、その点ではフィロンとある種の共通性が認められる。

さらにオリゲネスは『雅歌注解』の序文において、ギリシアの三つの諸学(倫理学、自然学、観照学)をソロモンに帰される「箴言」、「伝道の書」、「雅歌」に対応させると共に、ソロモ

ンの優越性を借用論によって示し、キリスト教教育においてはソロモンの三つの書こそが「真の哲学」であるとみなす。従ってオリゲネスは予備教育と哲学、神学の関係の位置づけを巡るアレクサンドリア神学の議論(「神学の侍女としての哲学」)を何らか意識しつつも、教会共同体の中で予備教育や哲学に一定の役割を認めるような議論を敢えて回避することで、聖書を聖書のみによって解釈する「テキスト共同体」の設立を構想していたと考えられる。以上のようにフィロン、クレメンス、オリゲネスは各々が置かれた共同体の具体的な状況に応じて聖書解釈を行っており、「テキスト共同体」の概念はアレクサンドリアの聖書解釈の系譜を辿るためには有効な概念であると考えられる。

ミトラ教研究

——一六世紀のゾロアスター教ペルシア語写本から——

青 木 健

筆者は先に、一六世紀のゾロアスター教におけるミトラ神の復権を指摘し、その原因はホラーサーンのゾロアスター教平信徒が、インド西海岸バルーチのゾロアスター教神官に宛てて送った書簡にあるものと推測した。古代の神格に対する信仰が、近世に甦ったとの理解である。だが、その理由を説明するまでには至らなかった。

その後に検討を進めた結果、一六世紀になるとインドのゾロ